



これからのお寺を考える情報誌

みえら

特集：お寺の「**経済**」を考える

宗旨を問わず自分の生を問い直す場所を目指す 日蓮宗 妙法山 真浄寺

檀家向け供養墓でさらなる絆を結ぶ 真言宗 御室派 紫山 無量壽院

すべての人を仏の子として存在を認める 浄土宗 浄雲院 心光寺

「劇場」という祈りの場をプロデュース。若者が集うお寺を作り出す 浄土宗 大蓮寺塔頭 應典院

Vol. 3
2011

『外側から見えること』 数字で見るお寺に関する一般人の意識調査

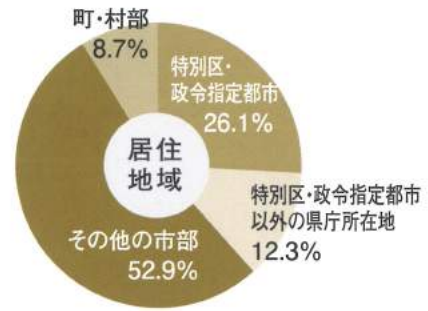
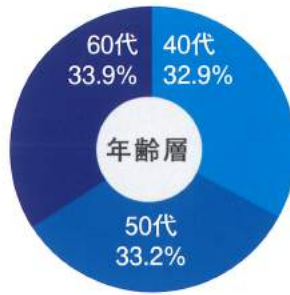
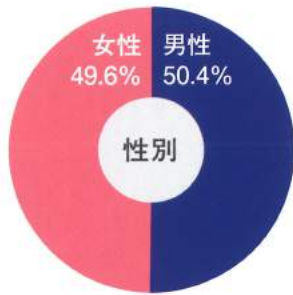
(参考資料:2009年3月臨床仏教研究所が実施)

第1弾

問. あなたにとってお寺って何をするとところ? お寺で何をしたいですか? お寺に何を求めていますか?

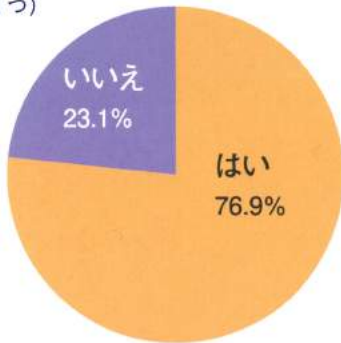
この質問に対する一般の方々の意識調査結果が今後のお寺の在り方の指針になるのではないのでしょうか。今、お寺が出来ることは何か、われわれ企業は「お寺と人を結ぶ」をどうかたちにすることが出来るのかこのコーナーで考えていきたいと思ひます。

●全国40歳から69歳までの男女600人を対象にアンケートを実施 有効回収数566(94.3%)



1. あなたは、昨年1年間にお寺を訪れましたか

(○は1つ)



この結果で意外にも人がお寺に足を運んでいると感じたのが、私の正直な感想だ。希望は見えた!

お寺は生活の一部に溶け込んでいるのではないか。(喜)しかし、その目的理由を見ると少しこの気持ちが変わってくる。

半数以上の方の訪れた理由を見ると、お墓参りに次いで観光旅行、法事とつづく。

お寺の行事の参加、お供えや付け届けの数値が少ないことが現代人のお寺に対する意識を表す数値ではないでしょうか。

墓参りや法事は、おそらく単発的なお寺との接点で観光旅行などもその傾向が強いものではないでしょうか。お寺に来てもらうことはもちろん大切であるが、お寺という場所に来ることと、お寺にいる人に会いに来ることとはその深さが違うような気がする。

点と点の関係から線の関係へ。

この関係づくりが「お寺と人を結ぶ」ことになる大きなポイントでは。

昨年1年間にお寺を訪れた目的は何ですか。

(複数回答)

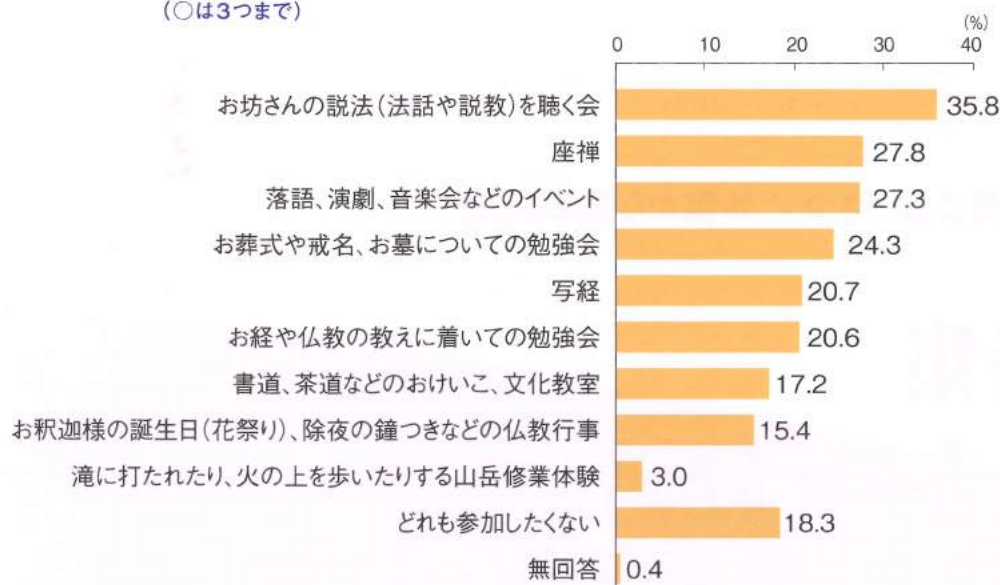


注:回答は、昨年1年間にお寺を訪れた人435人のみ。

みんなのお寺だよ。」

2.お寺で以下のようなことが行われ、参加してみたい行事はありますか

(○は3つまで)



さまざまな人がさまざまなかたちで

お寺に行ってみたい。

そして注目すべきは、その多数を占めるのがお寺さんの話が聞きたいことや何らかのかたちで仏さまの教えに触れてみたいという回答だ。

ようはお寺は死んでから逝くところよりも生きている間に行くところだと意識している人が多いことだ。

この結果をみると

「みんなで行ける!」とひとりうなずくのである。(喜)

正直申しましてお寺の山門をくぐることはわれわれ一般人にとっては勇気がいることで、お寺に行く理由が欲しいのである。

その理由、道しるべをつくってあげることがお寺が出来るサービスなのではないのでしょうか。

内側からの発信は外側を見ることからその一歩が始まるのではないか。第2弾へつづく

『みんなてら』編集長



これからのお寺を考える情報誌

みんてら[®] Vol.3

CONTENTS

01 | 編集長ごあいさつ / 外側から見えること

03 | **特集**

07 | お寺の「**経済**」
を考える

09 | 10年後のお墓をプロデュース①
宗旨を問わず自分の生を問い直す場所を目指す
日蓮宗 妙法山 真浄寺

12 | 10年後のお墓をプロデュース②
檀家向け供養墓でさらなる絆を結ぶ
真言宗 御室派 紫山 無量壽院

16 | 10年後のお墓をプロデュース③
すべての人を仏の子として存在を認める
浄土宗 浄雲院 心光寺

21 | 人の集まるお寺づくり①
「劇場」という祈りの場をプロデュース。若者が集うお寺を作り出す
浄土宗 大蓮寺塔頭 應典院

特集

お寺の

「経済」 を考える



中島隆信教授



2005年にお寺の現状・仕組みを解説した本『お寺の経済学』を出版し、仏教界に大きな反響を呼んだ慶應義塾大学商学部教授の中島隆信氏。

『お寺の経済学』では、「経済学」とは「人間の行動には合理性があるという前提の下で世の中を見ていく」ものであると位置付けられる。この定義からいけば、「経済」とは、「人々の行動にひそむ合理性」と言えるだろう。お寺の経済とは、人々がお寺を訪れる、お寺との関係性を持つ合理性、動機付けである。

高名な社会学・経済学者のマックス・ヴェーバーは、人々が支配を受け入れる正統性の根拠として、「伝統的正統性」「合法的正統性」「カリスマ的正統性」の3つに分類している。多くの社会は、その政治形態を伝統的なもの(王政など)から合法的なもの(民主主義)にシフトさせた。

同じようにお寺でも、「お寺に人々が来て当たり

前」という時代は終わりを迎えつつある。寺院には、変革が求められている。人々の供養行動を檀家制度という「伝統的正統性」によってお寺が支配できていた時代は過ぎ去った。これからの時代のお寺に求められるのは、お寺が一般の人々の供養ニーズ、お寺に求めるニーズに応じたサービスを提案していくことである。

『お寺の経済学』が発行されて5年以上が経過し、お寺を取り巻く環境も変化している。今回の特集では中島隆信教授へのインタビューを通し、お寺が今後どのように生き残っていくか、人々のニーズにどのように応えるかを考え直す。

お寺を取り巻く現況

—「お寺の経済学」の発行から現在まで、お寺を取り巻く環境はどのように変化しているか。

出版後は僧侶や宗務庁からの講演会などの依頼が増えた。そうした場でお会いした住職からも危機感を打ち明けられた。「お坊さんが儲けていると非難される」「檀信徒との付き合い方をどうしたらいいか」という悩みをよく聞いた。宗務庁の講演会など大勢が集まると華やかな活動をしている僧侶もいて前向きな印象を受けるが、個々のお寺では悩みを抱えている状況のようだ。

ただお寺を好きだという人は減っているが、仏教を好きな人は増えている。空海の密教美術展などには、若い世代を含めて物凄い数の人たちが訪れた。

お寺の本来の役目は、仏教の教えを信者さんに伝えること。しかし現実には葬儀や法事のみであり、仏教を伝える場になっていない。「仏教は厳しい状況にある」という意見もあるが、厳しいのはお寺の状況だろう。



檀家制度を精算し 関係を作り直す3つの策

—葬儀や法事を中心としない寺院になるためには？

檀家制度を一度解消する、というのが根本的な方法。自分が本気で選んだ上でお寺との関係を築いている人はどれだけいるか。先祖代々でお願いしているから、お墓があるからという理由で、なんとなくお付き合いが続いている。

信教の自由は、自分の信仰を深める場所として

このお寺を選ぶか選ばないかという自由を含んだもの、お寺との関わりが先祖から受け継がれただけのものならば、世代が変わった時にお寺との関係が切れるのも当然のこと。

① 葬儀について

—葬祭からの利益を中心として生きる道については？

葬祭サービスに特化するのはお寺というより、僧侶として生き残る道だろう。日本全体の死者数は今後増加するので、しばらくは葬儀をやることで生き残れる。

ただ、それぞれのお寺が葬儀会館を建築するなどして、葬祭業全般を行うのは難しい。斎場よりお寺で葬儀をやりたい人もいるが、数は少ない。檀信徒以外にも営業していく必要があるが、お寺という立場もあり葬儀社と渡り合うのは難しいだろう。

② 現世利益

—現世利益を提供していく生き残り策は？

浅草のお寺に行って線香を体に付けるのは、どの程度の信仰と言えるのか。檀信徒としての信仰ではなく、観光だけでもなく、一定の現世利益を求めている。

そうした習慣を現世利益だと考えると、生き残ることもできる。沖縄では、浄土宗でも「南無阿弥陀仏」と唱えれば、病気が治ると伝えて布教している場合もある。新興宗教でないが、現世利益も求める土着のユタ信仰に少し仏教的な色合いを加えて布教を行っている。

病気になった場合に、心の持ちようを変える、現世の苦しみを逃れるために来世のことを考える、と言われてもすぐに救いの実感は持てない。こだわりを捨てることを目指すのは当然だが、方便として「南無阿弥陀仏」を唱えれば病気が治ると伝える。真言宗系なら加持祈祷もやっているが、浄土系でもある程度は行うのも方針のひとつだろう。

本当の宗教とは、危機的な状況で試されるものだと考えている。新興宗教だと「この商品を購入すると病気が治る」といったことを言うが、伝統仏教だと「うちの境内にお墓を建てれば病気が治る」とは



言わない。

現世を越えた救いを堅持するお寺と現世利益を打ち出すお寺、両方が並立するだろう。

③ 布教

一社会の中に宗教に対する抵抗感があるが、布教を推し進めることはできるか？

お寺と檀信徒が触れ合う機会がもっとも多いのは、今は葬儀の時。会場に大勢の人が来るので、すべての世代に共通する話題になる。個人の心に響く話はやりにくい。

私の場合は檀那寺があり住職や副住職といろいろと話ができる関係になっている。銀婚式も寺の別院でやったが、それは結婚生活をこれまで無事に過ごせたことを仏様に感謝する気持ちがあったから。個人に対するお寺の態度としては、多様な付き合い方を許容していくしかない。



一3つの方法の中では、どれが最も有効なのか？

どれが正しいわけではない。お寺に対するニーズがあれば、それに応えるサービスがあっている。お寺が生き残るためにはなにか1つの分野だけをするのでは厳しいので、いろいろなことをやっていたかなければならない。

お寺の運営に求められる経営学

一個人に対しては、どのようにお寺をアピールしていくのが有効なのか？

別に毎日会うわけではなくても、なにか困った時に頼れないかと思ってくれるのがお寺。お寺は「よろず承り」の場所であって、新興宗教だとコミュニティーとして生活全般に関わっている。単に法事や葬儀と

いう行事をやる場所ではない。檀家という家族制度との付き合いがあると同時に、個人レベルでの信徒さんとしての付き合い方を持つようにしていく。

一その付き合いの方法とは？

お寺は特定の分野の専門家ではない。世の中にはさまざまな悩みを抱えている人がいて、その心の悩みに触れることができるのが信仰。僧侶と話がしたいという人がいれば、もっとお寺に行く人が増えていく。具体的にどうすればいいかとなると、それは個々の住職の能力だろう。

通常のエconomic活動で考えれば、檀信徒はカスタマー（顧客）。経営者であれば集客を考える際には、自分の強みがどこかを考える。僧侶も同じで、方針を立てることができるお寺が生き残れる。

一明確な方針を持ってないお寺も存在するだろうが、その原因は？

1つはお寺の後継者制度の問題だろう。サラリーマンや教師をやっていた人がお寺の後を継いだ時に、いきなり個人事業主、中小企業のオーナーのような立場になる。マネージメント能力など、お寺を担う能力が不足したまま住職になる。

大きなお寺だと若いころから住職と一緒にお寺の活動をやって学ぶことも多い。サラリーマンの感覚でお寺を継いでしまう人もいる。決まったことだけをやって生き残れた時代はお寺の世界でも終わっているのではないか。

一イベントの企画など、外部から住職を助ける形でお寺を盛り立てることができるか？

「なぜお寺でやるのか」という意義は必要だろう。コンサートをやって人が来るというのではお寺でやる必要性が薄い。お寺の文化的・宗教的コンテンツがどう生かされているか、価値を高める工夫がないと難しい。

お寺に来てただ念仏を唱えるだけではなく、念仏を唱える場所・舞台装置を整えてやればより人が集まる。四国の八十八ヶ所も、弘法大師の故郷という歴史や自然環境、巡礼者に対する地元からの施しなど、舞台装置があって興隆を見せている。

今後のお寺の展開

—これからのお寺はどのような形になっていくのか？

宗教学者という仕組みがあり、信者、檀信徒、国民の側に主体性がある。国民が宗教に何を求めているかに注目すべき。



ビジネスは消費者によって成り立つ。消費者がある程度賢くないと、そのビジネス、市場は成長していかない。良質な消費者がいて、良質な市場が育ち、結果として良質なサービスも成長していく。

消費者がサービスの良し悪しを判断できなければ、いいサービスを提供する人も市場から撤退していく。今はまだ檀家制度があるから、かろうじてお寺が残っている。しかしこの先、いい信者、賢い信者、宗教を理解する人を育てていかないと、お寺は実体のないものに育っていく。いかに次世代の信者を育てていくか。長い時間がかかると思うがそれをやらなければお寺が消えてしまう。

—いい信者、賢い信者とは？

仏教の教えを学んだ時に、こだわりを捨てる、少欲知足といった考え方は非常に優れていると感じた。

私は経済学のインセンティブという視点から、「人間は欲求を持つことで行動を起こし、向上心が生まれそれでハッピーになれる」と考えていた。だから、仏教の考え方を知った時に感動した。人間が無駄な欲求を持っているから、結果的に充足できなくてハッピーになれない。そのことで世の中で悩んでいたたり困っている人はたくさんいる。

しかし仏教はそうした人々を信者としてきちん

と取り込んで来たのか。正しい宗教の教え、教育がされてこなかったから、困った時にこそ宗教に頼るのだという考えがなく、信者は増えない。

私たちが店に行って商品を購入するときに、その商品が何であるかを分かってから買う。分からなければまがい物を買う人に騙される。いい商品を世の中に残していくためには、買う側がしっかりと勉強して賢くならなければいけない。それは宗教にも当てはまる。優秀な先人たちが仏教の歴史を築いてきたのだから、仏教は勉強するに値するものだと思う。

—宗教に対して、学習するインセンティブは働く？

日本では宗教教育を避ける傾向が強いことが、一番の問題になる。

特定の宗教ではなく、宗教というものを教える。宗教の学習は非常に後ろの方に追いやられている。だが、今一番必要なのはそうした思考の基礎となるものの学習。

ハーバード大学のマイケル・サンデル教授の哲学講義は、日本でも盛況を博した。語り方次第では、仏教でも同じように、分かりやすく高度な話を人々にできる。経済学的な考え方を、「功利主義」の一言で片付けられるようなスケールで。

ヨーロッパの学問は神学から始まった。神学や哲学がピラミッドのトップにあり、経済学はかろうじて学問の下の方に置かれている。宗教はそれだけの価値を持つものなのに、日本の若い人たちは宗教について誰にも教えられずに育っている。

お寺を中心とした コミュニティ

—永代供養墓を中心として、お寺が死後を考える場としてのコミュニティを作る可能性は？

今までのお墓のあり方は家族中心でやってきて、先祖代々のものである。現在では生活のスタイルは核家族化し、さらに子供がいなくて、家族は離れて暮らしている。その環境で、お墓だけは再び全員集まるという思想を受け入れるのは難しい。

永代供養墓の需要が高まるのは当然の成り行きであり、お寺がそのニーズに応えるのも当然のこと。



仏教の教義からいっても、絶対的に正しい葬り方というものは無い。

—「正しい葬り方はない」という部分だけが強調されて、葬儀をしない直葬も増えているが？

宗教の考え方が浸透していない人が増えている。これまでは人が亡くなった時ぐらいは宗教が役に立つと思われていたが、それすら失われてきた。しかしそれは、今まで賢い信者を育ててこなかったことの帰結ではないか。大学の授業でも生徒が寝ていたり遅刻していたりすると、「生徒はけしからん」と言われる。だが、先生が魅力的な授業をやれないから生徒がいなくなる。

お寺の場合、これまでわけも分からず僧侶が読経し説教を聴き、しきたりだからと戒名をもらい初七日をやってきた。直葬になってしまったのは、儀式の意味を伝えることができなかつたお寺の責任も重い。

—そうした状況で、人々が集まるお寺を取り戻すためには？

特定のやり方があるわけではなく、それぞれのお寺の文化的・宗教的強みを生かすしかない。

居酒屋の例を講演会などで挙げるが、行きつけの店なら何回も通っているから細かい会計を見ずに払う。

僧侶との付き合いで言えば、個人と個人として、行きつけの店となる努力が必要。信頼関係があるなら、相手から言われた費用に、「これは嫌だ」「これは高い」とは言わない。

もともと僧侶との付き合いはそうだった。それが



行きつけの居酒屋からチェーン店の居酒屋になった。疎遠になれば、値段で見られるようになる。

—震災もあり、人々も心の拠り所として集う場所を求める風潮が強まっているのでは？

人々の思考が、両極端に分かれている。サラリーマンが同僚と飲みに行くならば、安い居酒屋になる。家族や大切な人の誕生日となれば、中身が良く分かっていて信頼できるそれなりの店に行く。お寺も用途に応じて、使い分けになると考えている。直葬などの風潮も、葬式を形だけやればいい、なるべく安ければいいという人が増えてきた結果。

葬儀の場に声がかからないのは僧侶がやってきたことの結果であって、葬儀の場で信者を教育するという考え方はおかしい。

—本山などがお寺を再教育し、より質の高い僧侶を育てる可能性はどうか？

いいことだが、動機がなければ実現しない。その点では、行政による宗教法人の改革は1つのきっかけになると思う。

宗教法人への課税が議論となっているが、信教の自由がありいきなりの課税は難しい。まず、きちんとした活動を行っている宗教法人と、休眠状態の宗教法人の選別が行われるのではないか。公益法人の再認定のように、宗教法人も再認定される。

宗教活動が活発ではないのに庫裏だけはやたらに立派だとすると、庫裏は個人の所有物だから宗教法人の非課税資産からは切り離される。個人財産として登録されたり、法人が宗教活動とは別に持っているものとして課税される。

時には宗教法人格が取り消されるだろうが、変な宗教法人を撤退させる意義がある。複数の寺院を住職1人で兼任していたりと、実質的に休眠状態のお寺もたくさんある。そうした状況では、住職の負担も大きい。宗教法人はそれぞれのお寺レベルでは撤退の選択が難しいので、制度上のルールを当てはめていくしかない。

—ありがとうございました。



みんなのお



10年後のお墓を プロデュース

① 日蓮宗 妙法山 真浄寺

② 真言宗 御室派 紫山 無量壽院

③ 浄土宗 浄雲院 心光寺



武見潮裕 住職



宗旨を問わず 自分の生を問い直す 場所を目指す

日蓮宗
妙法山真浄寺

4月24日、豪雪が去りようやく春の兆しを迎えた新潟県の長岡市は、前日の雨が嘘のような晴天が広がった。長岡駅から車で15分、辺りを穏やかな農村に囲まれた日蓮宗妙法山真浄寺の境内にはしだれ桜が満開に咲き乱れ、水芭蕉やカタクリ、雪割草が花開く。美しい花々の中には、ピアノの美しい旋律に耳を傾ける人々の笑顔があふれていた。

同寺で春と秋に行われる「苔庭コンサート」は同日で18回目。今回の演奏者は新潟県のピアノ演奏を切り開いた先駆者でもある鍋谷毅氏。演奏曲目は歌謡曲からタンゴ、JAZZまで幅広い。

同寺がこのたび建立した永代供養墓「こもれびの詩(うた)」の開眼法要も同日に行われた。檀家、信徒、コンサートを目標に訪れた人々が、同寺の

武見潮裕住職らの読経に合わせて、いっせいに手を合わせる。老若男女を超え、宗旨宗派を超え、そこでは亡くなった人たちへの祈り、そして、いずれは死すべき存在である自分への祈りが共有されていた。

人気イベントとして現在では多くの人を集める同コンサートだが、現在の興隆に至るまでは厳しい道をたどってきた。同寺はそもそも、檀家を持たないお寺だった。

《檀家ゼロからの再出発》

同寺は戦前まで、檀家を持たずに田畑を運営することで運営基盤を成り立たせていた。しかし1945年以降の農地改革により、田畑は農民へと分け与えられる。しかしその点について、住職はしっかりとした笑顔を見せる。

「檀家が少なく経済的な基盤が弱いことは、檀家制度に縛られず、お寺の本当のあり方を考えて自由に活動できるということでもある」

檀家が少ないことは、檀信徒、お寺に来る人たちに対して、どのような関係性を築くかを問い直させた。父である先代住職の姿を見ていた住職は、



苔庭コンサート

「父は檀家を非常に大事にしていた」と感じたという。今では同寺の名物となった境内に広がる杉苔も、先代住職が赤土だった地面を手入れしたところから始めたものだ。

「私が若かったころ、父が言った言葉が記憶に残っている。『今日本は貧しいが、いずれは経済的には復興してくる。物が豊かになれば心も豊かになり、庭造りもしたいと思うだろう。その時になって苔がどうだと言ってもすぐに苔の胞子が飛んでくるわけではない。私はその時のために、苔の手入れを行ってきた』と。小学生の私にはよく分からなかったが、今ではその言葉の意味をかみしめている」

《檀家だけではなく、信徒も集まる寺へ》

檀家だけではなく、信徒が集まるお寺がこれから必要とされることを住職は指摘する。

同日の開眼法要では、しゃれこうべが納骨された。昔、刑場ではりつけになった人のもので、ある医師の家で代々活用され保存されてきた。30年ほど前に同寺に預けられこれまで住職が供養してきたが、預けた人の家は他宗に属していた。

「檀家制度は、今生きている人が選択したものではない。既に亡くなった方が、幕府、行政から与えられたのがスタート。家族制度からしても、現代ではその範疇に入らず生きている人がたくさんいる。檀家だけではなく檀家制度の枠外にある人が、生き方も含めて考える場所としてのお寺が非常に

大事。葬式仏教ではない、本当のお寺の姿、お坊さんの活動がそこにあるのではないか」

故人をしのぶと同時に、生きている人が自分の魂を考える場所としてお寺で何ができるか。そうした思いを持つ住職が近隣の廣川仏壇店に相談、川本商店に話がつながり、永代供養墓「こもれびの詩」の建立となった。

「忙しい毎日の中で、安らげるところ、癒やされる場所として、自分の居場所があることは安心につながる。亡くなった方の供養もあるが、生きている人たちが永代供養墓をそうした安らぎの場所として集う」

《こもれびの詩》

「こもれび」とは、お寺全体を包む全体的なイメージでもある



「こもればとは、カゲを含みながら光が照らす場所。カゲは影と陰の2つの字を書く。日の当たる方の影、そして陰っているの陰。こもればはお日様が注ぎ、自然の木々の緑が揺れる温かな安息の場所でもある」

「詩」も同様に、単なるポエムではなく、境内に響くすべての環境を示す。「お経も詩であるし、墓前で先祖や生きている家族と語り合う言葉も詩。それに応えて浮かぶほほえみも詩だろう。自然の風や揺らぎも詩である」

「こもればの詩」の中心に鎮座するのは、日蓮宗の本尊である十界勧請の大曼荼羅を表す宝塔。全宇宙を象徴したもので、遺骨が合祀される場所でもある。

その脇には、個人墓が点在する。先祖代々の墓ではなく、個人として大切に思う人に合掌したいというニーズに応えた。この個人墓も、いずれは合祀を前提としたものである。「誰も手を合わせることがないお墓は無縁墓になってしまい、存在価値がなくなる。それなら皆さんが手を合わせてくださる合祀の方が故人の供養になる」という住職の考えからだ。

同寺の景観も、個人墓を後から柔軟に追加で建立することを可能にしている。

「うちのお寺の姿からして、個人墓が点在しても、境内の景観として自然な形になる」

個人墓を合祀墓と同時に設けなかったのは、経済的な理由もある。合祀墓の建立に当たって同寺では檀家から寄付を募らず、通常予算で賄った。初期投資ができるだけ少なく済むこともあり、個人墓を後から境内に建立できる仕組みとした。

合祀墓と個人墓は、トータルとして大きなステージをイメージした。宝塔の前には祈るための場所があるが、そこから辺りを見回すと、合祀墓と個人墓が祈る自分の方向へと向いているのが分かる。お参りしている人があくまで中心となっている。

「法華経には『私たちは仏様になる種(仏種)を持っている』という教えがある。仏種が目覚め、仏性として育てられる。そうした造りとなっている」

《 永代供養墓は生前供養墓に通じる 》

「こもればの詩」は永代供養墓という形で故人を祀る場所であると同時に、自分たちの生き方を見つめる場所でもある。

「故人に祈ることは、自分に返ってくる。『回向』、人を拜むことは自分が拜まれることで、先祖を供養することは自分も人から供養されること。祈りが亡くなった人に向かえば永代供養だろうが、自分に向かえば生前供養となる」

同寺では、生きている人たちが主体的にお寺で活動をするをを目指す。苔庭コンサートは、演奏者をはじめ運営に携わる人など、皆がボランティア、布施行として活動している。住職がお寺という場所を活用してもらいコンサートの準備をするのも、布施行の一環だ。

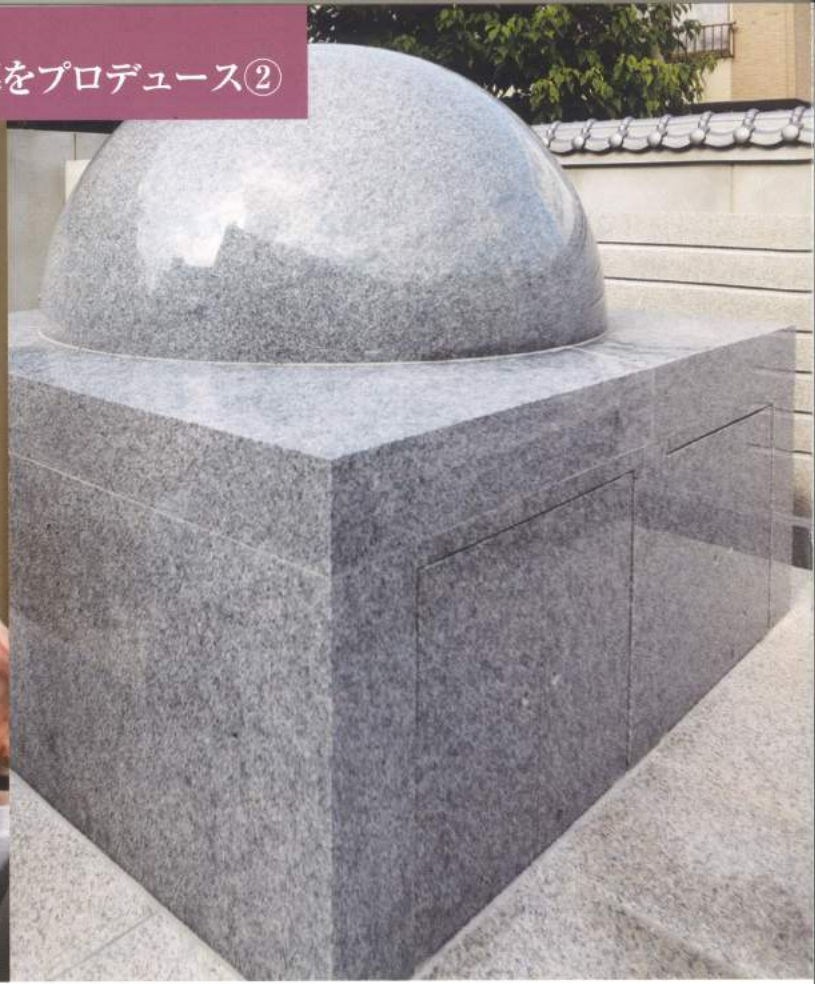
「ご先祖から引き継いだのは他宗であっても、よりよい生き方に生かすために法華経の教えを学ぶことはよい。日蓮宗の檀家になれとは言わない。檀家制度からは離れたところで、多くの人の拠り所になるお寺を目指している。私自身はまだまだ力不足ではあるが、お寺に来られた方と一緒に悩み、乗り越えていきたい」と住職は笑顔で語る。



境内には豊かな苔が広がる



大井幹雄 住職



永代供養墓の球は宇宙を表す

檀家向け さらなる 絆を結ぶ 供養墓で

真言宗 御室派
紫山 無量壽院

「檀家寺は外に出て行かなければ仕事にならない。札所や観光の盛んなお寺ではない。医者でいえば往診ばかりだが、それがこの寺の役割だと思っている」

そう語るのは高松駅から徒歩で15分ほどの場所にある、真言宗御室派紫山無量壽院の大井幹雄住職。同院は739年に行基が開山したと言われる長い歴史を持つが、戦火などに見舞われ何度も場所を変遷。17世紀に現在の場所に移るが、1945年に空襲により再び全焼。文化財を含めたすべての建造物が失われながらも、戦後同地に再建、現在に至る。

《月参り、変わるコミュニケーション》

同地域の特徴として、月参りの習慣が残っていることが挙げられる。1回で拝む時間は15分～20分だが、その後で檀家と話す機会ができる。

「お話といっても『体の調子が悪い』『あそこうどんは美味しい』とたわいもない話もあるが、檀家さんと話す重要な機会になっている」

しかし、月参りという伝統的習慣も、労働形態の変化などから、次第に数が減少してきているという。

「私がこの寺に帰ってきた時は何十年経っていても、ずっと月参りしている家もあったし、月に何回か仏さんごとに参っている家もあった。その時は奥さんやお年寄りが家にいたり、『家の鍵は開けておきます』という家庭もあった。

今は奥さんたちも仕事に出ているので、平日は留守の家が増えているし、無用心なので鍵を開けておくこともない。月命日に参る家は自然と減ってきた。ただ新しい仏様の場合は『毎日参ってもらえるか』と言われる場合もある」

月参りの件数が多いため、それ以外の檀家へのケアを怠り、檀家数を減らした時期もあった。



永代供養墓

「檀那寺といいながら、法的に決まったものはない。普段お参りしていない家や、昔だったら参りにくかったこともあり、近くのお寺さんに代わりに参ってもらっている檀家もある。檀那寺という意識が強くなければ、『近くのお寺でいいじゃないか』ということになる。直接そこに檀家さんが電話するようなケースもあった。それで縁が切れてしまう場合もある。法事や葬儀の時だけしかコンタクトを取らない檀家さんもある。寺からの発信は続けていかなければという思いはあるので、秋の永代土砂加持（※編注・清められた土砂を用い先祖供養などを行う密教の法会）など行事の案内は出すようにしている」

同院では法要の時など、なるべく布教者に法話を依頼せず、住職自身が1時間くらいの話をする場を作っている。以前は布教使など外の人間に頼んでいた時期もあったが、住職が話す方が寺の内情にも触れることができるからだ。結果、話を聞くために残る参加者が増えた。

「住職が話をする方が、身近に聞けるようだ。説教ではなく、法話と俗話を交えている」

ほかにも同院では、2ヵ月に1回ほど茶道の家元の稽古会にスペースを貸し出している。街中で便利なこともあり、200人から300人集まるといふ。

「檀家以外にも参ってもらう、門から入ってもらう機会にしている。お寺を知ってもらうよい機会」

《永代供養墓のコンセプト》

同院が永代供養墓を造ったのは2010年の10月。大日如来と8つの仏舎利（ストゥーパ）をイメージしたデザインになっている。

「真言宗でその根本となる宇宙をも表す仏様は大日如来なので、永代供養墓にもこれは外せない。球の部分は宇宙をイメージしており、永代供養墓に供養することが宇宙に帰ることもである。基本的な概念でいえば輪廻転生。お骨は無機質になるが、私たちの肉体の一部になってまた帰ってくるというイメージ」

8つのストゥーパは納骨を行う場所でもある。

「ストゥーパはお釈迦様の骨を納める場所であり、仏様を祭る塔、お堂でもある。納骨するところとして、ぴったりと合致した」





周りの景観を考え永代供養墓の高さも塀と同じ程度に抑えた。

「住宅地でもあり、広く公募しているものではない。パンフレットの配布は私がお参りなどでご縁があるところだけ。宗派は関係なく遺骨を預かるつもりだが、今のところは檀信徒向けにご案内している」

永代供養墓の側にはベンチとイスが置かれ、休憩できるスペースにもなっている。

「仏様とゆっくり語れる場所にしたいことが1つの理由。もう1つは、今後の社会を考えると、乳母車みたいなものを押してくるお年寄り、車椅子の方も増えてくる。お墓はどうしても自分が年を取ってからのお墓参りを考えなくてはいけないので、若い時のイメージで建造してはならない。段差をなくし、できるだけスムーズにお参りできる造りが望ましい」

費用については同院では遺骨の預かり料と永代供養「永代経」の費用を分けており、個別に申し込むことができる。20年間個別に安置して、その後合祀を行う流れだ。

合祀でも名前を残したい思いは強い



《 永代供養墓を建立して 》

檀家向けに2011年6月時点で1,200枚刷った永代供養墓案内のパンフレットのうち、1,000枚分は既になくなった。

建立後の利用者の反応として意外なことが2つあった。1つ目が、半年で20件ほどの申し込みにつながったことだ。

「それだけの申し込みが集まったのは、想定外のところもある。お寺がある限りは供養するのが永代供養墓。30年50年の間だけ持つようでは駄目で、より長いスパンで供養していくものだと考えている」と語る。

「新しい墓地の形の必要性は20年以上前から感じていたが、実際の申し込み者の数を見ると、高松も時代が変わっていると改めて感じさせられる。私は団塊の世代で、団塊チルドレンも多い。だが、その後かなり子どもの数が減った。自宅に参るたびに『この家は後々、お墓をどうするのだろう』と考えることも多かった。」

継承者がいても都会に子どもたちが出て、お墓参りの負担を若いものにあまりかけたくないという不安も多いという。

もう1つが、墓誌代わりのプレートが好評だったことだ。

「永代供養墓を利用される方が気にされているのは納骨することかと思っていたが、『ここに納めた』という印を必要としてプレートを申し込まれる方が多い。残された者にとっては生きた証が必要なのだろう」

永代供養墓に対する抵抗感がある人もまだまだ多かったという。また、永代供養墓への申し込み者は決して供養の気持ちが個別墓を建てる人より薄いわけではなかった。

「お寺に遺骨を預けるということの意味を大事に



仏舎利を模した納骨部

したい。納骨だけだったら、市の納骨堂でいい。お寺は供養をする場所で、収骨するだけの場所ではないし、お寺の永代供養墓の中心は『供養』にある。実際、納骨された方で永代経も申し込まれる方の割合が多い」

《「檀家寺」として生きる》

住職には、永代供養墓によって檀家や葬儀を増やそうという考えはない。

「檀家さん以外の方の申し込みを意図するなら、情報発信をしなければならない。HPなどに出すなどすれば、反響はあるだろうと思うし、新しい時代になってくるとそうしたことも必要になるのかもしれない。だが今のところは、積極的に永代供養墓の存在を打ち出していくつもりはない。あくまで檀家さんの不安を取り除くためのものだと考えている。

檀家さんから言ってもらうのは、『最後のところをカバーしていただいて、本当にありがたい』ということ。今回の地震だけではないが、『いつ何が起こるか分からないため安心しました』という檀家さんが多い」

同院は交通の便もよく、地理的には恵まれている。そのため、バブル時代には郊外へ移転しない

かという勧誘も多かったという。

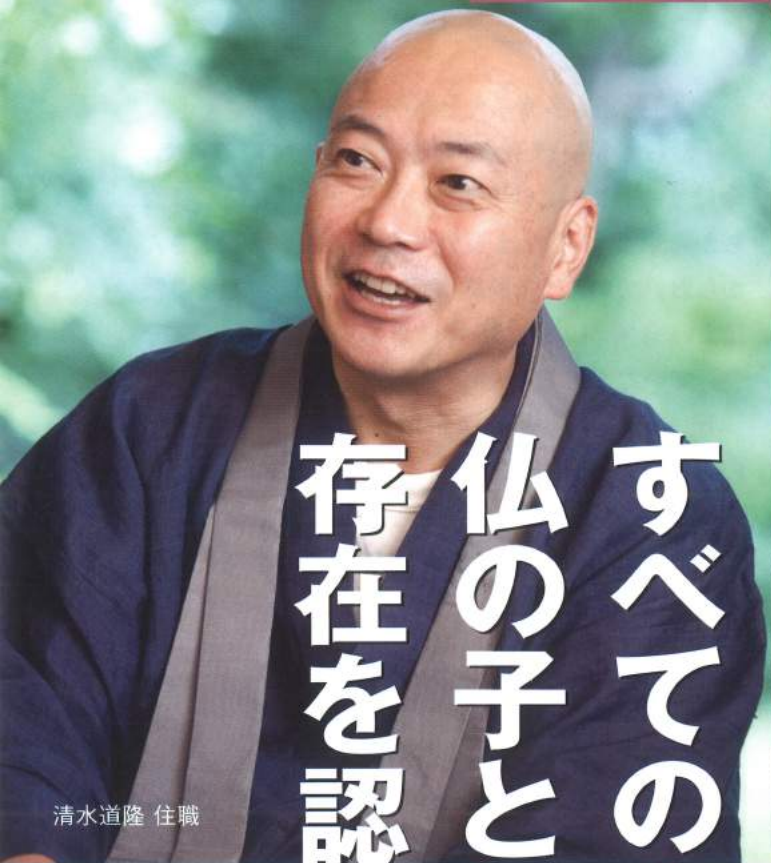
「参ってもらうためのお寺だと考えているので、今はずっとここにいて良かったと思っている。私たちから車で参るのは郊外でも構わないが、皆さんからおいでいただく時の便利を考えると、交通の便はよい場所がいい。郊外にお墓が別にあっても分骨していただけるのなら、気軽にお参りできる」

建立を機に積極的に発信して檀信徒を増やすのではなく、地方のお寺が地域の縁を太くし、今の檀信徒との関係をより密着したものにするための永代供養墓。その可能性を住職は提起する。



区切られた空間で祈りの場を色濃く





清水道隆 住職

すべての人を
仏の子として
存在を認める



浄土宗
浄雲院 心光寺

《永代供養墓「慈(いつくしみ)」に至った経緯》

東京都内の白山駅から徒歩で1分、薬師坂とも呼ばれる、辺りの商店街や学校に通う人々が数多く行き交う坂の途中に、浄土宗浄雲院心光寺は位置する。

同院の永代供養墓「慈(いつくしみ)」の開眼供養が行われたのが5月25日のお施餓鬼。建立に至ったのは、まず檀家数の減少傾向が確定的だということがあった。住職が10年前に試算したところ、35年後には檀家数が4分の3に減少するとの予測になった。

20年ほど前に供養塔を造り80柱が納骨できるようにしていたが、5年～8年前に急速に埋まった。一都三県で約100万柱の遺骨があるという大手広告代理店の調査結果を聞いたことも新しい供養施設の建立を後押しした。葬儀社からの仕事でも、お墓がないか必ず聞かれるという。経済状況もあり、

都内で寺院の境内墓地を探すのも難しい。郊外の墓を選ぶのも、利用者にとっては負担になる。

《「慈」のコンセプト》

「慈」を建立するに当たっては、寺の昔からの風景を尊重することを重視した。350年以上前に供養のために建立された阿弥陀像1体と観音像6体を境内から「慈」の地上部に移設させた。使用した石材も磨き加工を施したのは、花鉢と名前を入れる場所の数ヶ所に抑えた。5年ほど経つと苔も生え、昔からある供養塔と調和するように設計した。

地下部には個別墓スペースが196基分あり、納骨棚には約400柱の遺骨を収納できる。また今後の需要増に備え、墓内にはさらに納骨棚400基分の増設スペースを確保し、ニーズによっては個別墓としても追加できる。

開眼してからの問い合わせ・申し込みは8月時点で約15件。HPを見て来る人もいれば、檀家の中で「慈」のコンセプトに賛成する人、墓を守りきれないという人、お墓を造りたいが今は余裕がないので、33回忌までは寺院へ預骨しようという人もいる。



「慈」地上部

合祀の費用は10万円からとなっているが、事情を考慮する。「行政で面倒を見てもらっていて最終的に財産が一円もないという人でも、頼まれれば無料で納骨する。阿弥陀様は衆生救済と全員を救う存在。人間は土から生まれ土に還る存在なのだから、すべての人に還る場所を用意する」

「慈」で最も重視しているのは、死に際して宗教に触れるきっかけを作ることだ。ここ20年間で急激に増えた直葬は、宗教に触れる間もなく荼毘に付される人を増やす。住職が感じているのは、その現状に対する憤りだ。

「秋葉原などの無差別殺人が起こる時に言われるのは、『宗教もっとがんばってくれ』。少年院刑務所の所長から言われたのは、『子どもたちの家庭の90%以上に仏壇がない』ということだ。仏壇には位牌があり、先祖代々の歴史がある。仏壇があれば、例えば子どもたちが帰省した祖父母の家や、また祖父母の位牌に手を合わせる両親の姿に、子どもは不思議に思う。説明を受ければ、『こうやって命がつながっている』と考える。先祖を大切にすることは人を大切にすること。そうやって生まれてきた命だから僕も命を大切に、人の命も大事にしようと子どもは自然と思う」

《生き方・死に方を伝える機会を》

永代供養墓に入れば信徒として、檀家と同じように同院の施餓鬼会などの行事に参加できる。また住職は仏教に触れる機会を増やすために、法話や念仏、礼拝を通して仏の世界が完全に分かるようにカリキュラムを凝縮させた五重相伝会を2年前に行った。その際に住職は1人1人の参加者と、平均して1時間15分の間、会話を重ねたという。

「今までどういう人生を歩んできたかをひたすら聞くカウンセリング。これからどう生きたいかを聞き、

それから戒めとしての戒名をお付けする。永代供養墓への申し込みも同じで、申し込みしてもらうだけでなく、同じように話をお聞きする機会だと考えている。

お墓を売るだけなら、僧侶でなくてもやっている。私はお墓を求める人に、『墓に入れば人はこうなる』と伝える。死に方と同じく、生き方を伝え指針を示さなければ僧侶ではない」

《積極的な布施行の実践》

住職の視線は自坊だけではなく、社会全体へと向いている。東日本大震災に際して住職は現地で60日以上の間、ボランティア活動を行っている。被災した知り合いのお寺で活動した際には亡くなった方の戒名を1日かけてすべて書き写し、東京に戻ってからも供養を重ねる。地震では同院も被害を受けたが応急の修繕以外は行わず、その費用を被災地の支援に向けている。今後も5年間にわたって布施の1割を被災地に向けるほか、ボランティアを志す人々のために幅広い寄付を募っている。

「震災でこのお寺も800万円ほどの修繕を行う必要はあるが、別に使えなくなったわけではなく、徐々にやっていけばいい。こちらではお墓の相談や葬儀や法要などを不自由なく行うことができる。私を含めて現地に行った人たちが異口同音に語るの『不公平である』ということだ。だから、被災地がこちらの状況に追い付くまでは、向こうのために使う」

《あまねく救う、開かれた寺への意志》

同院では、「門を閉ざしたことは一度もない」と住職は語る。夜間は車などが入れないようにした時期もあったが、監視カメラを設置して防犯を強化



2つの供養塔の調和を目指した設計

するなど寺族に配慮した上で、常に門戸を開くようにした。

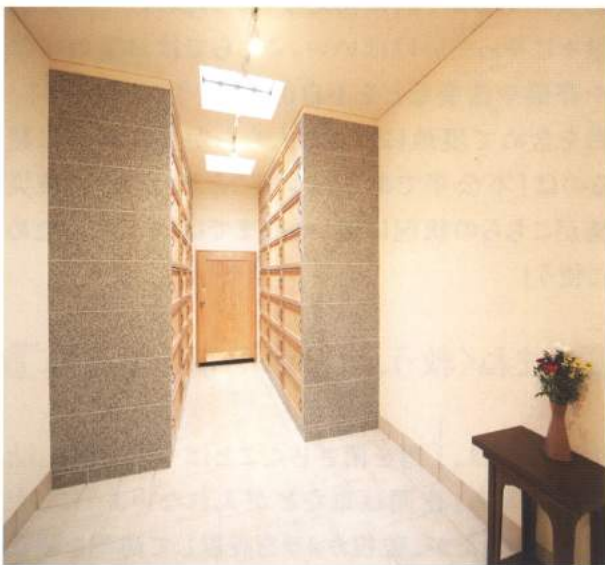
「私は阪神淡路大震災の際にもボランティアに出かけたが、門を開けている寺と閉めている寺は半々だった。開けている寺には皆が避難し、大変な苦勞をされた。閉めていた寺を批判する気はない。境内で焚き火などを始めてしまうのだから、寺を守るためにそうせざるをえなかった人たちもいる。その風景の中で、心光寺は門を常に開くということを選んだだけ」

境内にはあるベンチや本堂の前の階段など、昼食時には人の姿が絶えない。桜など花の咲く木も多く、春には大勢の人が押しかける場所でもある。しかし、寺にやってくるのは善良な人だと一般的に考えられる人たちだけではない。

同院の境内は、数年前までは高校生の遊び場だった。入口が狭くて中が見えにくいいため、生徒たちのタバコの吸い場所になっていたのだ。

「僕が出て行くと、蜘蛛の子を散らすように皆が逃げていた。そして食べ物も飲み物も買ってきて、みんな扉の外に捨てていく。ある日、彼らの逃げ場

「慈」内部には増設余地を設けゆったりとした造り



をなくして私は声をかけ、3つの約束をさせた。『挨拶すること』『タバコの火の始末はしっかりすること』『持ってきた食べ物や飲み物は買って来たコンビニに行って捨てること』。これだけ守ってくれたらお寺に来てよいと伝えたと、大勢の子どもたちが押しかけてきた(笑)」

平日の午後に来ると茶髪やガングロに化粧した女の子も境内にたむろしているのだから、檀家の中には彼らを怖がる人もいた。しかし相談を受けた住職は、「挨拶するように言っているから、声をかけてあげてください」と答えたという。

「檀家の方も怖いなど思いながらだろうが、挨拶されようとした。すると彼らの方から『こんにちは!』と挨拶してきたという。子どもたちを怖がっていた檀家のおばあちゃんは、玄関に来て涙を流しながら『あの子たちいい子だ』と言っていた。おばあちゃんだって、皆から声をかけられれば嬉しいものだ」

たむろしていた生徒たちは、最後には掃除して帰るようになった。人が捨てた物まで拾うようになった。

「よく来ていた生徒たちは、卒業式の後、お花とおまんじゅうを持ってきた。『住職お世話になりました』と。私は答えた。『私がお世話したのじゃない、寺には阿弥陀様がいて、住職は管理人にすぎない』。皆で本堂に行ってお念仏した」

未成年の生徒たちがたむろしているのだから、寺には学校の教師も来たし、警察も来た。しかし住職は方針を曲げなかった。

「今の高校生で、挨拶はできて火の始末はできて、ゴミを捨てない子はどれだけいるか。公園でタバコを吸っても彼らは変わらないだろうが、寺ならそうしたことを教えられる。みんな居場所がない。約束事を守らせれば彼らも変わっていく。制服から着替えて悪いところに行けば、売春なり麻薬なりとより深い悪が待っている。

誰もが入ってきて差別なく宗教に自然に触れる場所、寺はそういうところはず」

《寺を開くのは日常の行い》

同院では施餓鬼などの行事以外に、特別なイベントなどを行っているわけではない。それでも人が集まるのは、住職がすべての人を受け入れる覚悟を決めているからだ。

「宗教法人は公益法人で、特定の檀家のためだけに存在しているのではない。公益法人を名乗るなら、誰が来てもウェルカム、少なくともその人を認める言葉、『おはよう』や『こんにちは』といった挨拶は当たり前。どんなに怖く見える人が来ても挨拶をするように、寺の人間にも周知させている。寺に来て気持ちがいいなという方がいるからまた来てもらえる」

近隣の店舗を訪れた人が自転車を参道にとめる。住職は叱り付けず、そのことも受け入れている。

「寺は私のものじゃない。檀家だけのものでもない。車道や歩道に自転車をとめて事故が起こるよりずっといい。実際、私が車を使う際にはその店の従業員がエンジンの音に気付いてどけてくれ、それほど不便があるわけではない。この寺は怒らない寺だと思えば、いつも自転車をとめている人が中にも入ってくれる」

現在、同院を訪れるのは日に20組から30組。「今年は震災があり人々の不安が刺激されている非常時なので、普段からそれだけの人が来るわけではないが。うちの寺では特に緑を大事にしている。よく言われる話だが、門をくぐったら清浄の世界。寺に来られた方も私たちが皆が仏様になる人で、皆が仏の子。そういう人たちが境内で本を読んだり緑を楽しんだりお弁当を食べたりするのは、すごくありがたい。お寺は人々が癒やされ、安心を得て、心が満たされる場所」と住職は語る。



「慈」個別墓



「慈」永代供養棚



みんなのお



人の集まるお寺づくり

① 浄土宗 大蓮寺塔頭 應典院

《年間3万人の若者が集う寺》

早朝、お寺の本堂は演劇の開演初日に向けて、若者たちの慌しい時間を迎える。公演が近くなれば夜を徹しての稽古に入る彼らのほとんどは、フリーターなど不定期の労働を続けながら、演劇に打ち込む。

緊張感を高めていく彼らの前に、袈裟を着た僧侶が現れる。浄土宗大蓮寺塔頭應典院住職、秋田光彦師だ。應典院では舞台搬入に先立ち、住職が5分ほどの話をする。よく話すのは、「なぜお寺で演劇なのか」という話。演劇のルーツである勧進興行の紹介から、お寺という場の伝統、仏とのネットワークへと話は広がる。「客席の前からのお客さんのまなざしと、もうひとつ、あなた方の背中を見つめている仏さまのまなざしがあることに、どうか自覚的であってほしい」と。

これまでお寺に足を踏み入れることがなかった若者たちが、本当の祈りの気持ちから自然と手を合わせる。阿弥陀如来を若者たちがイメージしているとは必ずしも言えなくとも、それでも大きな存在に対して、彼らは真摯な祈りを捧げる。

JR難波駅から徒歩15分、繁華街から少し離れた寺町の一角にある同院には、常に若者の姿があふれている。應典院での劇団公演のべ回数は、1年に約40回。稽古などにも場所を提供し、その他

「劇場」という祈りの場を
プロデュース。若者が集う
お寺を作り出す

浄土宗 大蓮寺塔頭 應典院



同院には演劇を行う若者の姿が絶えない



應典院外観 一見してお寺に見えない



秋田光彦 住職

にもアート活動やワークショップなど多彩な活動が行われる。「年間3万人の若者が集うお寺」と呼ばれる由縁だ。

住職は「應典院で行われているのは演劇というより、表現を通じたスピリチュアルワーク」と語る。

「演劇に参加する青年たちは90%がフリーターで、格差社会を象徴する存在。現在の20～30才代の若者は、超就職氷河期を生きざるを得ない社会的弱者ともいえます。

自らの弱さを自覚しながら、表現に賭けることは、それを通して、世界や他者へ問いかけ、生きる意味を探しているとも言えます。いわば演劇やアートを通して、自分たちの内的成長を育てている、と思います」

《 應典院再建への経緯 》

大蓮寺の法嗣として生まれたが、住職は、若い頃は東京で映画プロデューサーとして活躍していた。しかし映画製作に失敗、数千万の借金を背負い路頭に迷う。その時に前住職の父が告げた言葉が、胸に染みだ。

「お仏飯をいただいて育った人間は、そのご恩を返さなければならない」

そして、住職29歳で、大阪の寺に戻る。

仏教界に入った住職だが、「それまで若い人たちと向き合う仕事をしてきて、すごくずれている」という感覚があった。若い人のチャレンジに、無関心、あるいは冷淡だった。仏教界から距離を取ろうと、住職はNGOの活動に関わり、アジア各国の仏教事情を見て回る。海外では、日本とは異なるお寺

のあり方を知って、驚いた。

「『小乗』と批判してきたアジアの上座部仏教の中に、大乘的な精神が輝き、大乘仏教の極北だと言われていた日本が、檀信徒だけが相手の小乗的仏教となっていた」

海外の仏教事情、そして阪神淡路大震災とオウム真理教事件という大きな転換点を体験する中で住職は、新しいお寺のあり方の模索を続ける。そうした中、大蓮寺塔頭の應典院の再建プロジェクトが持ち上がり、その統括を任される。

大蓮寺は建立当初から地域文教の寺院として知られてきた。境内には先進的教育で関西圏に知られるパドマ幼稚園もあり、戦後も文教の拠点として活動を続けてきた。大蓮寺の地域文教の精神、海外のNPOと仏教のコラボレーション、時代の中で弱者となっている若者たちの姿。住職は應典院を「葬式をしない」「NPOで運営」「若者とアーティスト」のお寺とすることを決意、大蓮寺450年記念事業として伽藍を再建、1997年、應典院は本格的に活動を始める。

「気づきの広場」と呼ばれる2階スペース 外にはお墓が見える



﴿ 布教と分離したNPOの運営モデル ﴾

應典院の運営に当たって住職が留意したのは、布教と社会事業を明確に区別することだ。

「それまで寺の社会事業はイコール教化事業というのが通念だったが、NPOのような市民による公益事業が一般的になると、宗教活動と市民活動を厳密に分ける必要があると考えました。

そもそも布教の言語は、一般市民には拒絶されやすい。むしろ、言葉に頼らず、さまざまな場や関係性のなかで、人々とつながろうとした。お寺は場所を提供し、NPOは活動を創造する、という協働モデルがスタートしました」

伽藍は宗教法人である應典院の所有だが、運営を行うのは應典院寺町倶楽部というNPO法人。住職も役員を務めるが、ほかの会長や事務局長などがネットワークを駆使して、さまざまな催しを実行する。事務局長は大学教員でもあり、専門の僧侶ではない。應典院では葬儀はやらないが、現代風にアレンジされた七五三法要や懺悔式などは行う。積極的に布教するわけではないが、要望があれば法話の会も行う。

NPOによる運営は、お寺の財政基盤にも関係している。同NPOには、公的な市民活動を援助する財団や企業メセナからの助成金が提供されている。「200人を超えるNPOの会員の会費や事業収入だけでは運営できない」というのが実際だ。

「喜捨(布施)と寄付は違うものです。喜捨には宗教性が伴うが、社会性はない。寄付は、公益的な価値があってこそ成り立ち、説明性や透明性も高い。寺が社会全体の公共的な存在になるために

は、お金の話は避けて通れない。世間では、『お布施の相場』のような興味本位な議論が目立つが、お寺がNPO化することで、その意味も変わってくる、と思います」

﴿ 死生観を考える場 生前個人墓「自然」 ﴾

NPOとのお寺の協働関係は、大蓮寺にも影響を与えた。大蓮寺で運営している生前個人墓「自然(じねん)」がある。「自然」への申し込みは生前に行い、自分の死後の拠り所を決めたいという思いを持つ人が集う。年代的には60代以上で、夫婦での申し込みが多いという。

「生前個人墓」という名称には、「単にお墓を提供するだけでなく、死生観と一緒に築きあげよう」という願いが込められている。

会員のコミュニティー作りを目的としており、年3回の合同供養、帰敬式やエンディングセミナーなど生前交流を重視する。当初は赤の他人だった会員が仲良くなるにつれ、「墓友」になっていく。「仲良くなったのでお墓を近付けてくれ」といった要望もあるという。

また生前個人墓のコミュニティー作りとして、エンディングに関わる医療や介護系のNPOと連携し、大蓮寺がプラットホームになり、さまざまな相談を中継するというサービスも提供している。現在の生前個人墓の利用者は約100人だが、「NPOをネットでも紹介しているので、そのネットの利用者も含めれば、ひとつのお墓を結節点にして、不特定多数のコミュニティーができていく」と語る。

生前個人墓「自然」





演劇が行われる本堂には阿弥陀如来



都会の中の寺町の一角に同院は位置する

「超少子化の時代に最も大きな不安は死後、自分がどうなるかということ。寺檀関係が基盤となっていた時代は、宗教観や死生観も確立されていたが、現代は都市化や情報化、個人化が進み、それも共有できない。であれば、まず死後を永代供養という形で保証し、今、生きているうちにお寺とご縁を深めましょうと。そこから安心を得て、多くは熱心な念仏信者になってくださいます」

《多様化するお寺のあり方》

住職は東日本大震災により、お寺のあり方が問われる時期が来ていると語る。「布教者の立ち位置は、常にご本尊を背にしています。いわば専門家と当事者の関係ですが、そうした『対治』の関係ではしばしば慣性的、あるいは権威的な問題を孕みがちです。

被災地で、若い僧侶たちは、ふだんの言葉や論理が通じない世界に身を投じた。自分の信仰を押しつけることはできない。ただ相手の悲苦に寄り添う他はない。私が阪神淡路大震災の経験で、布教原理ではない、共生の生き方に気づいたように、彼らも新たな立ち位置を発見したのではないのでしょうか。いわば『同治』としての仏教です。

被災地だけではなく、すでにホームレス支援や自死者遺族や念慮者を支援しようとする宗教者の動きは活発です。震災を経験した僧侶たちが次に自分たちの地域に帰って、それらとどのように反応しあい、新たな活動を生み出すのか、期待をしています」

まず布教ありきではない、社会とともに共生する仏教だ。

「そこでは、教えは他者とのかわりから生じる自己完成を導き出す、鑑の存在」と住職は言う。

應典院には、他宗派の僧侶たちがしばしば見学に来る。時間がある限り、住職は丁寧に成り立ちを話す。時には、お寺の将来に対する不安を口にする僧侶もいるという。

「少子化、人口激減、単身世帯急増などお寺を巡る環境は著しく変化しています。ただ旧来通り、お寺を護るだけでなく、これからはお寺を創る時代に入って行く。その時に、どのように社会と向き合うのか、お寺の実力が問われています。

同時に、お寺単独で何でもできるわけではない。應典院がNPOや若者たちと協働したように、地域社会と連携していく場面が多くなることでしょう。その時、僧侶として何ができるのか。非常に期待も大きいと思います。私は若い僧侶が『まず何ができるか?』と問われれば、地域にあるNPOと一緒に、お寺でひとつの場をつくっては、とアドバイスしています。イベントでもいいし、勉強会や会合でもいい。いろんな人と出会い、一緒に地域の課題に取り組むことから関係が生まれます。

教団活動も大事ですが、何でも横並びではなく、一個の寺、ひとりの僧侶として何ができるかを追求して欲しいと思います」

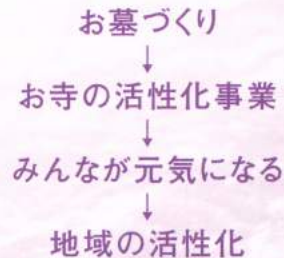


大蓮寺で行われたエンディングセミナー

みんてら

川本商店が考える『みんてら』とは

お墓づくりをサポートして100有余年



弊社は、創業以来100年余りにわたって、お墓づくりをサポートして参りました。おかげさまで全国約100箇寺でさまざまなお墓づくり、お墓の演出のお手伝いをさせていただきました。

そこで得た経験から

これからのお墓づくり&お寺環境整備事業

例えば、今話題の永代供養墓もこれからの世代に向け必要な施設の1つです。しかし、永代供養墓を建てたからといって、本来のお寺と人々との密接なつながりがかつてのように戻って来るものではありません。

まずは、お寺に人が足を運んでこそ永代供養墓が生きてくるのではないのでしょうか。

「このお寺に行ってみたい!」「そうだ、お寺に行こう!!」「とりあえずお寺に行ってみようか」そんな身近なお墓づくり、それが弊社の考える『みんてら』です。

※みんてらは川本商店の登録商標です。

お問合せ お寺環境整備事業

みんてら事業部 TEL 048-254-2222

発行元 有限会社 川本商店

本社 〒107-0052 東京都港区赤坂2-21-1

川口営業所 〒333-0844 埼玉県川口市上青木1-7-4

TEL 048-254-2222 FAX 048-254-0888

WebSite <http://www.kanze.co.jp>

E-mail kawamoto@kanze.co.jp

『地域のためのお寺』とは、生活者のお一人おひとりの異なる思いに共感や有縁の出会いが生まれることです。永代供養墓や、お寺の資源を活かした施設づくりは、人々の集まる、魅力のあるお寺を『未来への序章』として構築することです。

ご住職の、素の自分を自然にふるまえる『対話の場』から始まり、新たな出会いとなり、ふれあいが生まれます。

お寺の復権は経済的自立とともに、新たなステージの時代に向かっていきます。

人々も『無縁から有縁』を求めるように、お寺にもその環境資源を活かした『未来への序章』を発信する良い時期だと思います。

個性のある発信を専門のスペシャリストがお手伝いさせていただきます。

次号へつづく…

無 **縁** 有

かわもと

みんなてら事業部

川 壱 川本商店

創業100年 かわもとグループ
代表取締役 川本恭央

(有)川本商店

検索